

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	長野県小海町(南部 5 カ町村)在宅医療連携拠点事業実践報告
演者名	北澤彰浩 ¹ 、宮原みゆき ² 、由井和也 ³ 、由井崇之 ⁴ 、篠原敏子 ¹ 、 嶋田千代子 ²
所属	1 佐久総合病院附属小海診療所, 2 佐久総合病院小海分院 3 長野県国保川上村診療所, 4 佐久総合病院附属老健こうみ

目的

平成 24 年度に国が実施した在宅医療連携拠点事業が平成 25 年度から県に移行し地域の実情に沿ったものとなりました。長野県南佐久郡では一つの町村ではなく実質的な医療介護の連携が強い 5 カ町村が協力して事業を行うこととしました。複数町村が連携して一つの事業を進めることは大変難しいと考えられています。様々な工夫をすることにより一体感をもち実施できるのではないかと、また人口が少なく医療介護の実態が複数町村にまたがっている地域では地域が一体になり事業を進めなければ意味がないのではないかとという視点に立ち今回は複数町村が一緒に事業を行うことを選択しました。その選択が正しかったのかどうか今回様々な成果を報告致します。

実践内容

医療介護従事者がお互いの顔が見える関係になることは大変重要ですが、その医療介護の連絡会を複数町村一緒に 2 か月に 1 回の割合で行いました。そして、その連絡会の会場は各町村持ち回りで行いました。他には地元医師会の協力を得て医師の負担軽減目的で主治医不在時の在宅患者のバックアップ体制を IT ツールを運用することにより容易にする試みをしています。

実践効果

各町村を 2 か月に 1 回訪問することにより、実際に現地に行くことでその地域の実情をより理解することができました。毎回 80 名以上の方が集まり活発に意見交換をすることができたので、今後に役立つ提案等も参加者から出てくるようになりました。地域ごとの在宅看取りの様子を話し合うことにより看取りに関する共通認識も出てきました。医師の在宅患者のバックアップ体制も新規に協力を申し出る医師が出てきました。

考察

今回の在宅医療連携拠点事業自体は 3 年計画の 2 年が経過したところであるが、それなりの成果を上げてきている。残り 1 年を今回の 2 年を振り返り上手くいっているところはより押し進め、上手くいっていないところは見直しを掛け事業終了後も改善できる基礎を作るようにすべきではないかと考えています。